

profile

はらさわ・ようこ●1990(平成2)年生まれ、新潟県出身。新潟中越地震をきっかけに土木の道を意識し始め、大学ではコンクリート材料の研究を行う。2015(平成27)年、東急建設(株)に設計職として入社。2016(平成28)年から約1年半、山形県たかつむじやまトンネル工事に従事したのち、現在は再び本社で設計職についている。



現場で学んだコミュニケーションの重要性。設計も施工もチームワークの良さが仕事を円滑に進める鍵となる。

「初の女性」と言われることの不安

中学生のときに新潟中越地震を体験し、倒壊した建物や道路などを目の当たりにしたことをきっかけに、「安全は絶対のものではないけど、少しでも安全なものをつくることを目指していきたい」という想いが生まれ、土木の道へと足を進めた。

「大学の研究室に当社の技術職の方が研究のために何度も来てくださり、そこで仕事の話を聞いているうちに技術設計に興味が沸いてきたんです。その方との出会いがこの会社に入社を決めた一番の理由ですね」

設計職として入社し本社で働いていた原沢だが、二年目の人事異動で配属されたのはトンネル工事の現場だった。そのときの心境を問うと、「実は、最初は戸惑いが大きかったです」と明かしてくれた。現場を知らずして設計の仕事は全うできないという会社の方針で、山形県南陽市のたかつむじやまトンネル工事に携わることに

今回お話を伺ったのは、東急建設(株)で女性として初めてトンネル工事の現場を経験した設計職、原沢蓉子さん。かつて女性が関わるのは困難と言われたトンネル現場での経験や、今の仕事の面白さについて語ってもらった。

なる。

「配属が決まったときは、不安な気持ちが大きかったです。足手まといにならずに上手くやっていけるのだろうかとか、女性ということでの周りの人を困惑させることもあるのではないかと。色々考えてしまいました」

前例がなく、注目されるプレッシャーもあっただろう。初の女性従事者である原沢本人はもちろんそうだが、現場でもどのように女性技術員を受け入れるか悩んでいたのかもしれない。しかし、案ずるより産むが易し。実際に働き始めると、女性だからという不安は全くの杞憂だった。

「そんなことより、現場と対峙する意欲のほうが大変だと気付いたんです。求められるのは性別ではなく、やる気やスキルだったんだなって」と振り返る。タスク管理や人員配置、リスクマネージメント。工程を見据えた作業の優先順位。それぞれに必然性があることを働くなかで知った。現場でなければ得られない実感だった。

「机上で図面を見ているだけではわからないことが無限にあって、だからいつも『現場が大切だ』と徹底して言われるのだなと。一つひとつの発見から、自分の視野が広がっていくのを感じて、現場での仕事は一気に楽しいものへと変わりました」

最初は一年間、現場経験を目的としていた原

輝け! けんせつ小町

土木設計

原沢蓉子

東急建設株式会社
土木本部 土木技術設計部 設計グループ



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

my Beginning

「安全」を築き、守り続けるために。

私が建設業界に入った理由



右上／1日の業務はほとんどがデスクワーク。書類作成が多い。
右下／所属部署のメンバーは、年代も国籍も様々。外国人のメンバーとのコミュニケーションをとるために、原沢は英語も勉強中だ。
上／重要なことは現場事務所に赴向いて打ち合わせ。細かな作業内容などを確認する。



my **Growing**

私が建設業界で学んだこと

現場を意識した上で、 設計者として何を提案するか



上司や先輩に教わりながら仕事をする立場でありつつ、自らの考えはしっかりと。打ち合わせには自分なりの準備をして臨み、きちんと役割を果たす。

沢だったが、自ら「もう少し現場で仕事したい」と本社に願い出て、結果的に一年半ほど現場に身を置くことになった。

現場と設計、ふたつの視点

現在は本社に戻り、入社時と同じく設計職として働く。現場で学んだことは、現在の原沢の大きな糧になっている。

「より良いものをつくりたい」という志は本社であっても変わることはない。原沢は設計者として常に「現場のニーズに答えられているか」「設計者として正しい判断をしているか」と、現場での経験を思い描きながら図面と対峙するようになった。

「現場にいるからこそ体感できること、設計にしか判断できないことがあります。以前は、図面上の整合性ばかりにこだわっていましたが、現場を経験してからは、現場での施工性や生産性、効率といった要素を勘案していくことでより現実的、実効的な図面を意識することができるようになりました」と原沢は話す。

そして、この業界に足を踏み入れる契機となった、インフラの「安全」というテーマ。安全に絶対はないと口にしながらも、そこに少しでも近づこうとする使命感があることは間違いない。設計も現場もどちらも経験している自分だからこそできる提案を極めていきたいと力を込めて語る。

できていく過程に醍醐味がある

この仕事の醍醐味とは、少しずつできあがっていくプロセスを日々実感できること。原沢は現場にいたときに、それを噛み締めたという。「トンネルの中を移動する時間が日に日に長くなり、できていくのがわかるんです。私がいた最後の頃にはもう、徒歩での移動が大変なくらい。それを毎日、少しずつ踏みしめると、『できあがってきている』という喜びが増してくるんです」

本社に戻り設計者としての日々を送るようになってからは現場に足を運ぶこともほとんどなくなった。原沢は現場のあの空気を思い返しながら仕事をしていると笑った。

家族に見せられる仕事したい

入社から三年が経った今でも、仕事の面白さ、夢が日々膨らんでいると言う。次の目標は知識と経験を更に蓄積することだが、将来の夢に関しても聞かせてもらった。

「勉強しなければならぬことも多いし、結婚や子育てなどのライフステージでも様々な可能性があると思っているんですけど、自分の大切な人に自分の仕事を知ってほしいという想いは、とても強いですね」

原沢の上司である前田グループリーダーはそんな彼女に大きな期待を寄せている。



オフィスには休憩したり、仕事をしたりするための自由スペースが設置されている。同僚と休憩がてら語り合うことも。

my style

お休みの日は、買い物に行ったり、友人と会ったり、月1回くらいは少し遠出もします。とくに「食」に興味があるので、友人とはよく、ホテルなどヘアフタヌーンティーをしに行きます。ちょっと贅沢な空間で、手をかけてつくられたものを楽しむのは、お休みの過ごし方としてすごく好きですね。



スコーン、軽食、ケーキ。見た目も可愛いアフタヌーンティーセット

「彼女は、昨年十一月に現場で学んだ技術を社内の技術発表会で発表してグランプリを射止めました。グランプリを獲得できたのは、学ぶことに対する意欲の高さと、目標に向かって頑張る力を兼ね備えているからでしょう。自主的に前向きに頑張る力が彼女の武器です。その気持ちを持ち続けて、更に成長していった欲しいです」。前田リーダーはこう話してくれた。

初の女性のトンネル現場経験者というプレッシャーに負けるどころか、最大限に現場を楽しみ、「安全」を築きあげる醍醐味を再認識した原沢。何にでも「もっとやってみよう」「これも学びたい」と前向きに考える姿勢は、これから彼女自身を大きく成長させるだろう。その姿は後に続く後輩や部下にとっての新しい道を拓くことにも繋がっていく。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと